

「満州」幻想の成立過程

——いわゆる「特殊感情」について

一 はじめに

「赤い夕日」の満州。かつて多くの日本人の夢と幻想を駆り立てた土地であった。この夢と幻想の落とし子だった「満州国」。新しい領土、新しい生活、新しい政治の理想郷の夢想とは裏腹に、異国の土地での異民族支配によるおびただしい殺戮、流血、差別、また戦乱による多くの家族離散などの苦痛の記憶、永劫の後遺症を残したまま、わずか一三年五ヶ月で歴史から悄然と姿を消した。この一三年余の間、「赤い夕日」のロマンチズムは、現実とかけ離れた軍歌の歌詞^①、戦争文化のプロパガンダの中でしか、存在しなかったはずである。

血の真紅は時が経つとともに色が薄れ、古の戦場の殺戮も今日において人々を楽しませるドラマ、歴史のロマンになり得る。文化の

象徴性と創造力は、血まみれの現実を隠し、そのロマンだけを歴史に伝える、不思議な創造力を持っているように私は思う。

それから六〇年が経ち、苦痛の記憶が歳月の流れとともに薄れてゆく中、かつて「満州幻想」を作り出し膨らませた「文化」現象が蘇り、同時代人の、生まれ育った遠き大地への「郷愁」を煽り立て、また写真、映画、文学作品などを媒介に戦争を知らない世代の中にも浸透しはじめる。こうして「赤い夕日」の満州は、古い軍歌の哀傷のメロディーとともに、血なまぐさい現実をふるい落としつつ、ロマンチックな心象風景となって、日本人の心に刻み込まれてゆく。こういう意味で私は、「赤い夕日」の満州は、かつて戦争文化が作り出した、現実にはない夢幻であり、むしろ傷跡が癒された戦後になって初めて、一種の文化的ノスタルジア^②として日本人の心に現れたのではないかと思う。

姜 克 實

満州は、かつて政治的には日本と「特殊の関係」をもつ地域とされた。また「赤い夕日」の「郷愁」に象徴されるように、日本人にとって「特殊の感情」を懐かせる土地でもあった。この満州文化をはぐくんだ「特殊」の関係・感情とはなにか、また歴史的にはいつ、どのように形成されていったかを、小論において検討したい。

一 いわゆる特殊感情について

日本人と満州の邂逅は日清戦争に遡る。劉建輝は、日本人が日清戦争の「思わぬ収獲」として満州を『発見』した^③、また、その後、満州の「夢」は「日清戦争後のおよそ五〇年間にわたって膨らみ続け」た^④、という。「思わぬ収獲」とは、開戦当時想像もしなかった、「戦利品」としての遼東半島の割譲であろう。しかしこの邂逅は日本人の満州イメージの形成につながったわけではなく、劉も指摘したように「三国干渉によって一旦遼東半島を中国に返還すると、この地に対する関心が急速に薄れ、かわって『新領土』となった台湾への眼差しがにわかに熱くなってきたからである」^⑤。

「思わぬ収獲」だっただろう、三国干渉が日本人の心に残したのは、喪失した「領土」への未練ではなく、大国ロシアに対する憎悪感、復讐心だったと思われる。

その後、北清事変（義和団の蜂起）後のロシアの南下政策に対する警戒の中、満州への関心が再び高まったが、それも主として、膨

らみつつある「朝鮮幻想」への地政学的障碍としてのイメージが強かった。少なくとも日露戦争において「勝利」を収めるまで、日本人にとって、満州はやはり、大国ロシアの陰にある、手の届かぬ遠い、危険の地としてしか、イメージされなかったのである。

朝鮮獲得の道を開くため、一九〇四年、日本は国運をかけ、大国ロシアとの対決に踏み切ったが、「戦捷」の報とポーツマス条約（一九〇五年九月）の結果を受けて初めて、朝鮮と地続きの満州に対する新たな領土的「幻想」が生まれたのである。それからの四〇年間、この幻想は、商業、工業、移民開拓、生活、政治などの面に拡大し、日本帝国主義の満州進出の国策に煽られて急速に膨らみつけたのである。

満州幻想を広めた文化・思想的要素について劉建輝がいう、

「日露戦後にわかに流行り出した『ここはお国を何百里／離れて遠き満洲の／赤い夕日に照らされて／友は野末の石の下……』という『戦友』の歌は、……もともと意識的に伝達しようとしている亡き戦友への心情もさることながら、その眠れる場所としての『赤い夕日の満洲』の持つ独特の感傷ないし叙情性を国民一般の心に濃厚に植え付けたのみならず、これに源を発して、以後『赤い夕日の満洲』というイメージは、あらゆる言説の中で流布しながら、次第に一つの心象風景と化し、多くの日本人の『満洲』観の原型を形成していったと思われる」。「……そしていわゆる『二〇万の英霊、二〇

億の国帑（国庫金）を代償に勝ち取った『満洲』は、その後まさにこれらの『犠牲』の記憶とともに人々の心に深く根差し、辺境でありながらも、いつの間にか感傷、ひいては郷愁の対象へと変貌していったのである⁷⁾。

劉は文学研究者の眼で、「満州幻想」を広めた「軍歌」など文化的要素と、「犠牲」の記憶という思想意識を鋭く析出しているが、それに加えて私はこの論において、「満州幻想」を可能にした歴史・政治的背景も提起したい。すなわち、日露戦後から日本がロシアから譲渡された、東清鉄道およびそれに付属する各種権益、大連・旅順の租借権をはじめとし、第一次世界大戦を経て膨張しつづけたいわゆる特殊権益の意識こそ、「満州幻想」を生成・発展させた政治、経済的土台であり、また「満州幻想」を膨らませた客観的条件だったのである。もし日露戦争における日本側の「勝利」、またその後行われた満州経営、満州進出の国策、居留民の生活の営みがなければ、「満州幻想」が膨脹するはずはなく、軍歌「戦友」に描き出された「赤い夕日」も、従軍経験のある同時代人の「感傷」を誘うにしても、今日のような、多くの生活経験者の心を捉えた「郷愁」になり得ない。言い換えれば、「赤い夕日」という軍歌「戦友」の歌詞に時代を超えた生命力を吹き込んだのは、その歌の芸術的成功ではなく、満州への経略、進軍という、その後四〇年にわたって続けられた日本帝国主義の国策だったのである。

文化がいったん政治の奴隷にされた場合、事実を歪め、非現実の虚像を造り、また政治の強大な行使力を借りてこれらの虚像を一気に広める力があり、また民族、国家全体の至上利益を背景にするが故に、それなりの感染力もある。ラジオ、レコード、センセーショナルな新聞のタイトルを通じて多くの青年が「赤い夕日」という満州の雄大な景観に憧れ、軍人、開拓民としてその地に渡って帰らぬ人となった。彼等は、そのつらい「追体験」のなかで眺めたあの「赤い夕日」の風景から、はたして当初のようなロマンチズムの感動を覚えたのだろうか。

「赤い夕日」の満州に象徴された「満州文化」は、このように同時代人の生活経験に根づいた面があると同時に、「満蒙開発終局の理想を実現し行く」ための道具、「吾人が満蒙に優越権を維持する上に必要の条件である」という⁹⁾、日本帝国主義の植民政策に伴う政治文化の性格をも併せ持つており、今日我々がこの封印された「満州文化」¹⁰⁾を繙く際に、決してこの点を忘れてはならない。またこの赤い夕日のロマンチズムは、当時同じ地にいた他の主体となる生活者——三〇〇〇万の中国民衆、あるいは同じ日本帝国主義の満州幻想の落とし子であった、二〇〇万を超える朝鮮人移民の目にどのように映ったかを、同時に観察しなければならない¹¹⁾。

二 いわゆる特殊関係、特殊感情の由来

1 生活の体験

満州国の出現、満州文化の土台をつくった、満州という土地に対する日本人の特殊関係、特殊感情はいったいいつ、どのように生まれたか。それはおおよそ、満州における実際の生活体験から生まれた実体の部分と、政治、文化を介して膨らませた虚像の部分（意識の部分）に分けられるのではないかと考えられ、また前者より、後者の比重がずっと大きいのではないかと考えられる。

日本人の満州体験は日清・日露戦争の従軍経験から始まり、日露戦後、ロシアから譲渡された東清鉄道の経営に従い、多くの実業、商業に従事する民間人も流入してきた。在留邦人の数は、日露戦前の四〇〇〇人未満から、一九一〇年の七万六三三一、一九二〇年の一六万〇〇六〇、一九三〇年の二二万八七四八人へと増えつづけ、その後満州事変からの大陸進出の国策に従い、さらに飛躍的に増大し、一九三五年五九万四七〇八、一九四〇年一〇六万五〇七二、一九四五年八月の敗戦時は一六六万もの日本人が満州の土地で生活していた。¹³⁾ 大連、旅順、瀋陽、長春、哈爾濱など満鉄沿線の大都市で生計を営む商人、文化人、軍人、技術者、本溪、鞍山など鉱工業地帯で働く労働者、また黒龍江、吉林の各地の農村で開拓事業に従事する農業移民など、さまざまな階層の日本人が存在し、満州の地で

生まれ少年時代を過ごした人も多くいた。

こうした日本人の生活の痕跡と満州文化の生活的基盤を、いくつかの統計数字を通じて見てみよう。¹⁴⁾

教育に関して、昭和二〇年の『満洲年鑑』によると、康德一一（一九四四）年九月現在、満州全域（関東州を除いて）には普通大学二二、師道（範）教育施設四八（大学、高等学校の師道科を含む）、建国大学など官吏養成の特設大学二、日本人教育の大学一、師範学校二（二六七頁）、ほか関東州には大学・高専四、師範学校二（三六〇頁）があった。

文芸に関しては最盛期の太平洋戦争前の一九四一年現在、文芸団体数一二、¹⁵⁾ 文芸欄を有する雑誌（『満文』へ『漢文』を含め、関東州を含まず、以下同）二五、文芸欄を有する新聞一二、純文学雑誌九、詩歌誌一三（三五九頁）、満州劇団協会加盟劇団体三一（三六一頁）、映画製作所二、放送局（一九四一年七月末現在）一七（三六八頁）があり、出版に関しては、康德七（一九四〇）年度末で、普通出版物一一六四件、民間発行定期出版物に新聞紙在籍三二七件、雑誌二八六件（三六九頁）があった。

『満洲建国十年史』によれば、満州文芸の「発醒期」は日露戦後から一九二〇年代の半ば、その後一九三六年までは「緩やかな成長期」であり、三七年以降は「興隆期」と「活動期」であった、という。¹⁷⁾ また最近出た『満洲国』文化細目に取り上げられた五七三

点の文学、文化関係の出版物の出版年次を表す「増減グラフ」も、満州国建国時から上昇し、一九三九年頃ピークに達するという曲線を描いていた¹⁸⁾。満州の文芸は、とくに満州国建国後、大量の日本人居留民の流入とともに、興隆した事実を物語っている。

すなわち、日露戦後から四〇年にわたる、延べ数百万単位の人々の満州における、居留、従軍、実業、開拓、学徒などの生活体験は、日本人の「満州文化」を生み出したゆりかごであり、また特に戦後の、満州に対する「特殊感情」やノスタルジアを生成した源でもあったと考えられる。

2 特殊権益論

政治の面で、先述した生活体験の環境を形成し、またそれを正当化し日本人に優越感を与えたのは、いわゆる日本の満州における「特殊権益」の意識である。この権益意識をさらに細分すると、一、政治面における「特殊権益」意識、二、軍事面の「生命線」意識、三、思想面の「生存権」意識および四、感情面、経済面における日清・日露の代償論に分けられるのではないかと思う。以下ではこの四つの面から、権益意識の生成過程と特徴を見てみよう。

まず特殊権益論について見てみよう。「権益」は、一般の政治用語として「ある国が他国の領土内で得た権利と利益」(広辞苑)を指すものだが、「特殊」という必ずしも意味の明確ではない言葉を

冠することによって、さらに多様な解釈の可能性を持つようになる。もっとも一般的な理解で、特殊の権益とは、国際的にはある国・地域の「権益」に対する、ある特定国による排他的、独占的占有を意味するであろう。

満州における特殊権益は、歴史・地理・経済上などの理由からもとロシアが所有するものであるとされ、主として一八九六年の露清秘密同盟条約、一八九八年の旅大租借条約に規定された東清鉄道および東清鉄道の南部支線(南滿鉄道)の敷設権、旅順・大連の租借権をめぐる諸権益を指すが¹⁹⁾、日露戦後、ポーツマス条約による権益の譲渡、またロシアの満州からの撤退と日本の同地への進出によって、日本のものと見なされるようになった。

山田豪一の解釈によると、「南滿洲におけるわが帝国の特殊な地位、日露戦争で獲得された特殊権益という語が、外交文書に登場するのは、一九一一年の第二回の日露協約の秘密条項で、ロシアの北満での、日本の南満での特殊地位を認め、排他的な鉄道敷設権を相互に確認したのに端を発する。地域的概念として成立するのは、一九一五年五月の対華二十一ヶ条要求によって、南滿に自由に居住往来し、各種商工業上の建物、農業を経営するのに必要な土地を商租する権利、東部内蒙古で農業及び付随工業を合併で経営する権利を獲得して以来のことだろう」²⁰⁾と。

特殊権益の代表である「対華二十一ヶ条要求」の内容を具体的に

見てみよう。一九一五年五月七日、日本政府が「最後通牒」の形で中国政府に押しつけ、五月二五日に調印させた条約および交換公文の満州に関する部分の内容は、およそ次のようになっている。

「③南満州及び東部内蒙古に関する条約（九カ条）、旅順・大連租借地および南満州、安奉兩鉄道の期限をいづれも九十九年に延長、吉林―長春間鉄道に関する日華借款契約を根本的に改定。南満州における日本人の居住、往来、営業、ならびに土地商租の権利の許与、東部内蒙古の都市開放、および日華合弁の農工業経営の認可。南満州および東部内蒙古における日本の治外法権の承認。④滿蒙優先権の件（交換公文）、南満州および東部内蒙古における鉄道建設のための外国借款ならびに同地方の税収担保の外国借款については、日本に優先的に商議すべき旨の中華民國政府の声明。⑤南滿顧問の件（交換公文）、南満州における政治、財政、軍事、警察に関する外国人顧問は日本人を優先的に傭聘すべき旨の中華民國の声明⁽²¹⁾、と。

日本の南満州および東部内蒙古における通商、居住、実業活動、借款、治外法権、顧問傭聘などのあらゆる面にわたる排他的特権の内容となっており、この内容は日華兩國の間だけではなく、アメリカとの間でも、日本が「支那ニ於テ特殊ノ利益ヲ有スルコト」を、一九一七年の「石井―ランシング協定」によって承認されている⁽²²⁾。しかし、こうした条約上の特殊権益は、武力を背景にした、「最後通牒」式の押しつけによる成立の経緯から、その後、中国政府を始め

国際世論の強い反対を受け、第一次世界大戦後における太平洋地域の軍縮体制をつくるワシントン会議（一九二一―二二年）と九ヶ国条約・四ヶ国条約によって、南満鉄道の経営および関東州租借等既得権益以外の内容のほとんどが否定され、条約としての根拠を失った。またこの時、こうした特殊権益を黙許した「石井―ランシング協定」も「日英同盟」も破棄されたのである。

一方ワシントン体制下の、日本の満州における「特殊権益」の喪失ないし縮小の事実とは無関係に、かつての条約にあった特殊権益に対する「意識」だけは、日本の政府、国民、世論によって受け継がれ、さらに一九二五年の郭松齡事件⁽²³⁾の策動、二七年田中義一内閣の对中国政策に関する東方会議による協調路線の方針転換、二八年の関東軍謀略による張作霖爆死事件などを経て野放図に膨脹しつづけ、ついに日本の満州侵略世論のバックグラウンドを形成するに至った。満州事変時の代表的国際法学者、信夫淳平が一九三二年に書いた『滿蒙特殊権益論』を見てみよう。

信夫は日本の滿蒙における特殊権利の内容を三つに分け、「[甲]条約上の根拠ある特殊権利にして」、関東州の租借権ならびに行政権、関東州内外の関税に関する諸権、南満州鉄道の経営権、撫順の炭坑、鞍山の鉄鉱採掘権など一七項目を挙げ、「[乙]条約上の根拠乏しきも事実的に我國の特殊権利と認むべきものにして」、安奉線付属地の維持とその行政権、安奉鉄道の守備兵駐屯権、「滿鉄付属

地以外に於ける領事館警察権、本邦銀行券の発行および流通権など五項目、「丙」すでに空権化したもの——「条約上の我が権利即ち支那側の義務が殆ど若くは全然履行せられざるもの」として、特定開港場の日本居留地設定権、満蒙内地の裁判立会権および共同審判権、満鉄平行線の不敷設の約束、「二十一ヶ条」で認められた鉱山採掘権、支那の警察法令および課税に対する干与権、南満州における土地商租権、居住、営業権など十二項目を挙げ、そのすべてを「我国現有の特殊権利」、「事実⁽²⁴⁾に於て之を我が特殊権利と称するに妨げない」権利、あるいは「一種の既成事実として権利の体をなすもの」として解釈している。もちろん、法学者の信夫はこの中にある特殊利益と成らざる部分も認め、質（＝経済的利益）を強調してその主たるものを鉄道、鉱山、租借地の「施設経営」を中心に十項目に再整理したが、一見スリムになった権益は信夫の曖昧な解釈——「大体これ等に依りて現実⁽²⁵⁾に示されてある所の政治的及び経済的の活動、それが謂ゆる満蒙特殊利益の大体である（傍点は引用者）⁽²⁶⁾」——によってさらに無限大に膨脹する可能性を含むようになった。

この解釈は一例に過ぎないが、満州事変後の日本人の権益意識を如実に映し出した鏡といえる。多くの日本人にとって、条約にある部分も、条約にはない既成事実としての部分も、また空文化した部分もことごとく特殊権益の内容として理解されているだけではなく、

以上のような「権益」にもとづく「現実⁽²⁷⁾に示されている所の政治的及び経済的の活動」のすべても、あたかも権益同然のように解釈されていた。

こうした解釈によって、「特殊権益」の言葉はもはや法律や条約による拘束力を失い、政治、外交の固有名詞から国民全体の感情意識へと昇華し、恣意に、思うままに膨らむ可能性が出てくる。

山本有造が言うように「満蒙特殊権益」という観念は、「時と場所に応じて自由に肥大化する性質を持っていた。日露戦争から満洲事変にいたる『満蒙問題』の展開は、限定的な支配の実態と肥大化した観念の間の落差をどのように埋め合わせるか、そうした葛藤の歴史であったということができる⁽²⁸⁾」。

このように、「特殊権益」という言葉の、条約、法律用語から国民意識への展開は、日本と満蒙のいわゆる「特殊関係」の虚像を作りだす役割を果たしたのではなく、日本人の満蒙に対する「特殊感情」の奇形的膨脹をも刺激したと思われる。

3 生命線論

「特殊権益」の場合、少なくともその出発点や、あるいはその内容の一部が国際条約という法的根拠に正当性を求めるのに対して、特殊権益論から変形して生まれた生命線論は、独りよがりの「意識」に過ぎず、権益意識、権益思想と同じように、いかなる法的依拠も

排除する恣意的で民族的エゴイスティックなものであった。

満蒙生命線論は、関東軍の対ソ戦略から生まれた発想といわれるが、その代表的なものは、一九二〇年代後半における石原莞爾の満蒙領有論、松岡洋右の満蒙に関する諸発言に見られる。さらにルーツを辿ると、次のような、一八九〇年第一議会における山県有朋の「利益線」と「主権線」の「外交政略論」にも遡る。

「国家独立自衛ノ道ニツアリ一ニ曰ク主権線ヲ守禦シ他人ノ侵害ヲ容レスニ曰ク利益線ヲ防護シ自己ノ形勝ヲ失ハス何ヲカ主権線ト謂フ疆土是ナリ何ヲカ利益線ト謂フ隣国接触ノ勢我カ主権線ノ安危ト緊シク相関係スルノ区域是ナリ……方今列国ノ際ニ立テ国家ノ独立ヲ維持セントセハ独リ主権線ヲ守禦スルヲ以テ足レリトセス必ヤ進テ利益線ヲ防護シ常ニ形勝ノ位置ニ立タサル可ラス」⁽²⁷⁾。

山室信一は山県有朋のこの発言にふれ、満州への日本の野心は、「地政学的発想」であるとし、次のように言う。

「日本の地政学的な条件の中で、朝鮮半島は、日本の脇腹につきつけられた七首である。そしてその七首に来るのはロシアしかない。それを防ぐためには朝鮮をとらなければならない。

そして朝鮮を守るためにはその接壤地域である満蒙にまでいかなければならない。こうした必然性みたいなものを考えざるをえなかった日本側の地政学的な発想があったことは事実で、これが『満蒙生命線』という議論に繋がっていきます」⁽²⁸⁾。

同じような地政学的、軍事・国防的発想は日露戦争前後の世論からも見られる。

一九〇四年二月の、明治天皇による「露国ニ対スル宣戦ノ詔勅」が曰く、

「帝国ノ重ヲ韓国ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス、是レ兩國累世ノ関係ニ因ルノミナラス韓国ノ存亡ハ実ニ帝国安危ノ繫ル所タレハナリ。然ルニ露国ハ其ノ清国トノ盟約及列国ニ対スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然満洲ニ占拠シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併吞セムトス。若シ満洲ニシテ露国ノ領有ニ帰セン乎、韓国ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス」⁽²⁹⁾。

満洲における露国の進出を、まず日本の朝鮮保全政策に対する脅威と見、次に朝鮮の存亡を日本の「安危」に繋げ、そして地理的に日本海、朝鮮半島を隔てていながら、日本の対露開戦をあたかも

「自衛戦」のように理論を仕上げていった。この理屈は決して明治天皇の独創ではなく、原形は、日露開戦前、高橋作衛の「国際自衛権論」にあった。国際法の専門家で対露開戦論者の「七博士」の一人でもある高橋は、朝鮮を取れ、満州も取れと、なりふり構わず気炎を上げるリーダー格の戸水寛人よりずっと冷静で、対露開戦を主張しながら、国際法の解釈からその正当性を見つけようとした。領土狭小ないし人口の増殖をもって理由とする戸水の理論を、単に「暴を以て暴に変ふる」に過ぎないとし、第三国の領土たる満州においてロシアと戦う正当な論拠を見つづけるため、この「国際自衛権」の主張のみが頼みの綱になると見て、次のように言う。

「されば満洲に入りて露国の行為を抑圧するは正に第三国に於て侵害者を抑圧する場合に適合し居るものにして、第三国即ち清国に対して日本の行為を正当ならしむるには国際自衛権を除いて説明を為し得べき理由あるを認めず。之を要するに満洲問題は単純なる満洲問題に非ずして日本の存立問題なり」。

他日ロシアが日本海、黄海、東海における制海権を有する場合「日本帝国の防備に果して安全なるを得べきや、満洲の問題は決して清国の保全問題のみに止まらずして、進んで朝鮮の存亡問題となり、日本の生存問題」⁽³⁰⁾となる、と。

高橋の場合、朝鮮を日本の主権線とし、朝鮮の領有を前提に国際自衛権の理屈を引き出していた。また自らの国際「自衛権」の理屈を全うするため、「満州中立」の主張を掲げ、朝鮮を確保するなら、あえて中立の満州に手を出す意図を窺わせなかった。日露開戦の主戦派の高橋には、満州に対する野心がないとは限らないが、すくなくとも、ロシアの満州における特殊地位が正当視された日露開戦前の時点において、時期尚早だと認識したと思われる。

日露戦争の後、満州から強敵ロシアを駆逐した日本は、韓国併合の途に進進する一方、関東州、南満鉄道の経営を通じて満州進出の足場も固めていった。その後、一九〇九年の安奉鉄道改築の強行、同年の間島に関する日清協約と満州五案件に関する日清協約の調印を通じて、日本は次々と權益を拡大し、宿敵ロシアとの間でも、一九〇七年、一〇年、一二年の三回の日露密約を通じて、満蒙における利権の境界線の確定、互いに利権行使の自由、利権の尊重を約束した。この新しい情勢展開の下で「満州中立」を訴えた高橋作衛の「国際自衛権」論は、もはやその使命を終え、韓国併合後、満州を大日本帝国の次の獲物と見る意識が高まってきた。

一九一三年八月、辛亥革命後中国の南北対立の内乱に乗じて、早くも「居住権」の獲得、「強制移民」の既成事実をつくるなど、いわゆる「韓国併合ニ次ギ茲ニ南滿内蒙古ヲ処分スルヲ以テ大陸政策ノ原則ト為スベキナリ」という「対支那意見書」が外務省に現れる

ようになり、その後、第一次世界大戦開戦時における大隈重信首相の日本は「依然として其の防禦の第一線は支那である」「支那は日本に取つて所謂唇齒輔車の親密なるものがある」説法や、一九一四年一二月、のち政府の対華二十一ヶ条の權益要求を演出した「對華要求に関する加藤外相訓令」にある「無用ノ誤解猜疑」を避けるため、南満州および東部内蒙古における「地位」を明確化する理屈や、一九二一年五月一三日閣議決定の「満蒙に対する政策」にある「満蒙ハ我領土ト接壤シ我國防上並國民ノ經濟的生存上至大緊密ノ關係ヲ有スルハ今更絮説ヲ須キス而シテ右二大利益ヲ主眼トシ満蒙ニ我勢力ヲ扶植スルコト即チ我對滿蒙政策ノ根幹ナリ」のような特殊關係論に基づく赤裸々な權益要求の理由などを経て、幣原協調外交が退潮の後、満蒙の領有を目的とする「生命線論」へと変貌を遂げてゆく。

一九二七年一二月の、在奉天日本総領事館の文書「對滿政策私論」はその代表格の一つである。曰く、

「○人口問題と食糧問題に苦しめる日本が地理的關係より満州大陸に活路を求め得るや否やは帝国存亡の問題なり

○東洋の平和を永遠に維持し帝国の安全を将来に保障せんが為（日韓併合当時の詔書）進んで満洲開拓の先驅者たる可きは東洋に於ける帝国の使命なり

○三A政策の米と三C政策の英との間に介在し天下三分の覇業と世界の平和を志す日本が満蒙に其確固不拔の地盤を求めんとするは必然の要求なり

○軍閥の私闘熾む時なく政治は政客の遊戲となり隣邦愈々乱れんとするに對し我死命を制する満蒙を列國環視の中にあり正々堂々其開發と安全とを図らんとするは我民族の本領ならざるべからず」と。

二年後の一九二九年七月に関東軍將校石原莞爾も「國運転回ノ根本国策タル満蒙問題解決案」において、国内不安の解消、對米戦争の準備など種々の理由を挙げ「満蒙問題ノ解決ハ日本ノ活クル唯一ノ途ナリ」と言い切る。

日本を守るための自衛論（高橋作衛）から日本を活かすための領有論（石原莞爾）へ、国防の視野から資源獲得の視野への力点変化が注目に値する。

この石原莞爾の理屈をさらにまとめ、政治・外交論のプロパガンダに登場させたのは、外交家・政治家松岡洋右の「日本の生命線」論である。

一九三一年（昭和六）年一月二三日、第五九議事會本會議で政友會（當時の野黨）を代表して幣原喜重郎外相に質問する発言において、松岡は初めて「満蒙問題は、私はこれは我國の存亡に係わる問題で

ある、我が国民の生命線である」と初めて「生命線」の言葉を使用し、その後その動機について「この五十九議会に於いて特に私の高調せんと欲した所は、第一、経済上、国防上、満蒙は我が国の生命線 (Life line) である。第二、現下の急に処する為め我が国民の要求する所は、生物としての最小限度の生存権 (Right to a bare existence) である」と、述懐している。

その後に出した単行本『動く満蒙』の序文において、松岡はさらに生命線論を次のように展開する。

「動く満蒙。夫は直に我経済上国防上の生命線として、歴史的に地理的に展開された地域である。我や既に業に多大の犠牲と巨資とを投じて、而かも我の要求する所は、民族的最小限度の生存権であるにも拘らず、未だに其要望は充たされず、今にして既得の權益をさへ侵されつゝ我特殊地位は著しく動揺を感じて居る。

特殊地域の満蒙。我に於て接壤の境土であれば、彼に於ても関外の辺境である。……我皇国の興廃を一举に、露国の極東侵略を撃滅して後、清廷漸く移民殖辺の政策を宣し、爾來風雨二十有六年、偏に我文化的施設と経済的援助と政治的庇護とによつて、支那人は今日の勢力を此地に扶殖し得た實際であると云ふも、敢て過言で無い(中略)。

広漠たる満蒙。夫は直に動かすべからざる史実によつて、我民族の為に解放された境土である。而して夫は我国力を賭したればこそ、露西亞帝國主義の侵略からして解放することを得た地域である⁽⁴⁾。

「満蒙は日本の生命線である」という松岡の造語は、その後、彼が行った一連のセンセーショナルな講演や著書によつて広く流布し、大恐慌の後、満州の進出による現状打破の機運に期待を寄せた軍部、財界の支持を受けつつ一躍時代の流行語となったのである。

4 生存権意識

満州事変前に流行した松岡の「生命線論」は、政府、軍部の政治的野心の鑑と言えるが、言葉自体はあまり古くない。「これは何も自慢する意味ではないが、実は私が作った言葉である⁽⁴²⁾」と、松岡が自ら認めているように、恐慌下の一九三〇年前後、つまり国際協調主義(幣原外交)・議会政治の退潮、軍国主義の興起という時代の雰囲気マッチさせるための俄作りの「作品」だったのである。しかし、この政治的作品を無批判に受け容れ、かつそれを流行させた背景には、民衆意識の深層まで浸透した「生存権」の認識があったと指摘される。

松岡の「生命線」論も、論拠の一つとして「生物としての最小限

度の生存権」を取り上げていたが、この生存権の意識こそが明治時代から日本人の帝国主義膨脹思想を支えた大衆的思想基盤だったと考えられる。矢野仁一は一九四一年に書いた『満洲近代史』において「日本は日露戦争の当時一マイルの鉄道もなく、一平方マイルの鉱山もなく、居留民といつても一六〇〇人そこそこに過ぎなかつたにかかはらず、生き死の利害を感じ国運を賭して戦つたのである」。「日本の満洲において有するところの利害は、……実にさういふ現存の利害に超越したる国家生存の根本に関する利害である」と言う。⁽⁴³⁾

この「現存の利害に超越したる国家生存の根本に関する利害」とは、すなわち領土、資源、人口論に基づく利害認識である。島国の日本は国土狭小、資源貧乏、とうてい毎年増え続ける人口を養うことができない。日本民族が自らの生存のため、海外へ新しい領土、資源を求める外、生きる途はない。一九世紀末のような進化の世の中で、腕力のない弱い国が淘汰されるのは、社会進化の法則で、文明発達の必然である、という。

弱肉強食、適者生存の理論である。このダーウィン、スペンサー流の社会進化論が明治維新後、欧米をモデルにした近代化の過程を通じて正当化され、日清・日露戦争を通じてさらにその可能性、現実性も見えるようになった。

徳富猪一郎（蘇峰）が一八九五年に書いた『大日本膨脹論』にお

いて、人口問題を取り上げ、日本の現人口は四〇〇〇万人あり、一〇年後に四五〇〇万、五〇年目にして七〇〇〇万、六二年後に八〇〇〇万に増加するだろうと予想し、この成長率は日本の領土、資源の限界を超えるものとし、民族の生存という理由から、「航路拡張、海外出交易、新版図占領、移住及び殖民」という海外への膨脹の論拠を導き出している。⁽⁴⁴⁾ 同じ時期、竹越三郎も『支那論』において、人口問題を切り口に、傲慢自大の清を倒し、「大なる日本」、大陸への発展を鼓吹する。日清の戦いは「当然也、必然也、人種的也。国民的也、国家的也。而して其争根の深甚なる生死的也」という。⁽⁴⁵⁾ キリスト者山路愛山も、生存権を掲げ、「余は人間は存在の権利ありてふ信念の上に立つが故に帝国主義の信者となれり」「他なし帝国主義に非れば人は地上に存在し得べからざればなり」とし、「生存権を希求する態度が対外支配の追求へとエスカレートしていった」のであった。⁽⁴⁶⁾

日清戦争後の大日本膨脹論を導き出したこの生存権の意識がその後二〇世紀にいたると、さらに日露開戦の主張、朝鮮保護・満洲進出の国民世論を支える主要な理論的根拠にまで成長したのである。

黒龍会の国府種徳がその「満洲植民論」において、「人口と領土、共に増加するに非らずんば、国力の膨脹は、断じて之を図るを得ず。国力の膨脹し得ざるは、隣国に於て、頻りに膨脹しつつある今日に在て、特に一国の生存を危うする者也」。「日本は、国家生存の為め

に、断じて植民地を、近接せる大陸に有せざるべからず。露国が満州鉄道を必要とする如く、日本は満州植民を必要とす……」⁽⁴⁷⁾と言い、日露戦前の対露開戦論の強硬派代表たる戸水寛人も、その行く先々で行ったほとんどすべての講演、談話、論説文において、まず人口問題の解決を理由に挙げ、生存のために、日本の朝鮮征服、満州進出の必要性、正当性を訴えていた。曰く、

「……此の勢を以て進まば明治四十二年に日本人口の増加は百万を超え明治五十一年には其の増加は二百万を超えることとなる可し一年に百万或は二百万を増加するものとせば日本の人口は遠からず現今の人口に倍蓰するに至らん借問す此増加せる人口は何れの処に配置す可きぞ……故に日本は速かに亜細亜大陸に割拠するの策を建てざる可らず然らずんば人口増加は反て日本の憂とならん」⁽⁴⁸⁾

日露戦後も、こうした人口・領土・資源論に基づく生存権の意識は日本人の中に浸透し、朝鮮半島移民、韓国併合の理論を生み出し、⁽⁴⁹⁾満蒙占領の根拠にも利用されたのである。⁽⁵⁰⁾一九三一年九月の満州事変の後、デモクラットの吉野作造までも「民族と階級と戦争」の論文において、「自衛権の発動」を掲げる日本の軍事行動の「帝国主

義的」本質を突き、ジャーナリズム全体、無産諸党を含む挙国一致の国民的戦争支持に深い懸念を示しながらも、理論的には「生存権」の理由を「正当」と認めた。曰く「日本の如く土地も狭く資源に恵まれず其上人口の極めて夥多なる民族は、這の権利を許されずしてどうして生きて行けるか」と。⁽⁵¹⁾

吉野がここで批判したのは、強権発動の「軍事行動」であり、また軍部の理屈（自衛権）を無批判に受け容れ挙国一致の世論を形成した国民の無反省の態度であった。もし日本の世論に「自由無遠慮な批判」があり、軍部の、「自衛権」をもって軍事行動を正当化する主張に従わず「始から日本民族生存の必要を楯に取ったら斯うまで難儀しなくても済んだらう」。⁽⁵²⁾この「国民的信念」である民族「生存権」の意味から、吉野は、国際世論、無産党によって封印された「帝国主義」という言葉に対する「再吟味」を求めたのである。吉野にとって、帝国主義が悪いのは、侵略主義であり、軍事行動であった。もし軍事行動に抛らない平和的な手段さえあれば、民族の生存権である「特殊権益」の要求は正当であり、いかなる国際問題も引き起こすはずはない、という。大正デモクラシー期の人道・人格主義的「日支親善」、「朝鮮自治論」の裏に見え隠れした吉野の「倫理的帝国主義」の一面は、⁽⁵³⁾ここで明確な姿で水面上に浮上してきたのである。

5 日清・日露戦争の代償論

日本人の満州への「特殊感情」の根源を掘り下げる時、忘れてはならないもう一つの水脈がある。それは、満州に「十万の英霊、二十億の国帑（国庫金）」を注ぎ込んだという言葉に象徴されるような、日清・日露戦争における犠牲意識である。

この論は、日露戦後、日本の大陸進出、特に韓国併合を正当化する理論の一つとしてマスコミに登場してきたが、次第にパターン化し、政府、外交筋の満州における特殊權益を獲得する理屈になった。一九一三年八月、牧野伸顯外相に提出された大竹貫一、岡部伊三郎等の連名「対支那意見書」⁽⁵⁴⁾、また一九一五年五月七日、大隈内閣の対華二十一ヶ条要求に関する中国政府に対する「最後通牒」にも登場し、その後、一九二〇年代後半幣原外交の退潮と共に盛んとなり、前述した松岡洋右の「生命線論」にも頻繁に引き出されるようになった。

一九二九年一〇月、太平洋問題調査会の席上において松岡は、中国代表の日本による中国權益侵害の指摘に対して弁駁し、「日露戦争の原因と其の結果」に触れ、次のように述べた。

「……我が国存在の根本に脅威を受くるに及んで始めて、実に止むを得ずして国運を賭し上下を挙げて強国露国と戦ったのであります。然かも此の戦争に於て吾々は如何なる犠牲を払いま

したか？ 実に十万の死傷者を出し、二十億円の戦費を費やしたのであります」。

「……日本国民は此の二十億円——当時の日本にとりては巨大なる負債でありました——の元利は未だ完済せず、現に今なお支払いつゝあります。私の概算よりして推すに、此の元利の全部を払い了りたる時には恐らく六十億円に達するであろう、と思います。而して之は何の為でありますか？ 全く李鴻章が露国に切り売りした満蒙を彼より奪回して、而も之を支那に還附したが為であります。之が為に斯くも巨大なる負債の下に日本国民は現に喘ぎつつあるのであります。（中略）次に血、即ち生命の犠牲に就て申したい。前に述べました通り犠牲にされて失われた人間の生命は金勘定で計算することはできないけれども、然し私は茲に支那の諸友に今一つお尋ねしたい。それは此の犠牲に対して諸君の感謝を何らか具体的方法を以て表示し、且つ此の巨大なる犠牲——我が国民の嘗めた屈辱・苦悩及び悲哀などは考慮の外におくとしても——之に対して満洲、もしくは支那の部分に於て相当な報酬を提供せらるるの用意がありますか？——ということです」⁽⁵⁵⁾。

さすがエリート外交官出身の松岡の弁舌である。利害関係のある相手側の中国代表を除いて、この弁は第三者の国、あるいは日本国

民にとって、理路整然として説得力があったに違いない。

指摘すべきは、このいわゆる「犠牲」は厳密にいうと、日露戦争のみに限定すべきものである。日清戦争の場合、日本側の戦死者はわずかに一五〇〇名弱であり、その代償として、清国から台湾などの領土割譲を受けたほか、賠償金として当時の政府予算規模の二年半分にあたる合計二億三一五〇万両の賠償金を獲得している。⁵⁷⁾

つまり、日清戦争の場合、「出血」というほどの犠牲はなかったのである。松岡もこの事実を意識したのだろう、日清戦争を避け「日露戦争」の犠牲だけを取り上げて論じているが、しかし、挙げられている数字はなぜか、日清・日露両戦役の合計数字であった。⁵⁸⁾ 外交官としての松岡流のレトリックの巧妙さには、まことに目を瞠るものがある。

こうして一九二〇年代の後半から、日露戦後世論の中で煽られてきた「犠牲意識」が、日本外交の顔ともいべき松岡洋右のアジテーションと演説のレトリックによって増幅され、日本人の満州に対する「特殊感情」の定着に大きな役割を果たしたと思われる。

おわりに

以上、第一節において「赤い夕日の満州」を中心に、日本人の満州に対するいわゆる「特殊感情」の実態、およびそれに支えられた「満州文化」の実質に対する分析・批評を行い、第二節において生

活体験、特殊権益論、生命線論、生存権意識、日清・日露戦争の代償論の五つの面から、近代日本人の満州に対する「特殊関係」、「特殊感情」の由来を見てきた。

私は、今日における「満州文化」を再評価する際、「赤い夕日の満州」に象徴された、ロマンチズムとノスタルジアの情緒にとらわれ、ややもすればその歴史の政治背景を見落とすおそれがあるのではないかと感じてこの論の執筆に至ったが、研究分野が違う第一節における文学・文化批評自体に不慣れなので、ごく簡単な問題提起の形にとどまった。その問題意識は、繰り返し言えば、満州文化を支える政治、イデオロギーの側面への注意と、歴史認識の風化によってもたらされるロマンチズムやノスタルジアという文学、文化的表現の特徴への指摘にあった。満州文化の現実とは、決して侵略や戦争を知らない私たちの世代が文字を通じて簡単にイメージできる、生やさしいものではないと、私は考えたのである。

第二節は小論の中心で、執筆の意図は、満州文化の根底を支える近代日本人の満州に対する「特殊感情」と「特殊関係」認識の形成・発展の特徴を、政治、思想意識などの面において描きだすことにある。もともとの計画では、日露戦前における日本人の初期満州認識の実証と、その後のいわゆる「特殊感情」「特殊関係」意識の形成過程についての検証という二つの部分となるが、紙幅の都合で前者を割愛し、ここでは主として後者を中心に展開する形とな

った。日露戦前の日本人の満州認識について、別稿を参照されたい。⁽⁶⁰⁾

結論として、日本人の満州に対する「特殊感情」と「特殊関係」といわれるものは、いずれも日露戦争の後に発生したものであり、かつ深い「歴史的」、「民族的」、また「文化的」由緒が見あたらなかったことである。また、その内実も、当初からはとんど政治面の権益意識、外交理論の自衛権、生存権論、民衆の日露戦争の代償意識のような、日清戦後に発生した近代日本人の帝国主義的膨脹意識の表れであり、独りよがりのアジアに対する領土、資源の野心に基づくものであった。言い換えれば、いわゆる「特殊関係」、「特殊感情」というものは、その始まりから見れば、必ずしも実際の「生活経験」に基づくリアルさがなく、帝国主義に基づく国策によって人為的に作られ、国民に植え付けさせた、政治的なものであった。もちろん、日露戦後から満州事変まで、日本の満州経営の展開にしたがい、「生活経験」に基づく特殊感情も次第に発生したが、限定された少数者のみの経験であるので、日本国民全体の感情とはいえない。満州文化の要素の一部になりえた、真の「生活体験」に基づく特殊感情⁽⁶¹⁾の発生はずっと後のことであり、在満日本人の人口が飛躍的に増大した、一九三一年九月の満州事変以降の事であろう。

注

(1) 「満州の赤い夕日」という言葉が最初に登場したのは、一九〇五年、真下飛泉作詞、三善和氣作曲の軍歌「戦友」である。その一番の歌詞はこういう、「ここはお国を何百里離れて遠き満州の赤い夕日に照らされて友は野末の石の下」と。この軍歌は大ヒットし、その後大正、昭和へと歌い継がれてゆく。

(2) 「ノスタルジア」に関して、残留婦人、孤児の生活体験を研究する蘭信三は八月八日(ソ連の参戦)前後の、「希望に満ちた満州」と「苦難の逃避行」の対比によって生まれ、増幅した意識だというのが(『満洲移民』の問いかけるもの)『環』一〇号、藤原書店、二〇〇二年七月、三一二頁)、これに対して私は、こうしたノスタルジアの普遍的性格に疑問を持ち(特に蘭が指摘した逃避行で肉親を見殺しにした人々の場合には当てはまらないのではないか)、それは、犠牲の少なかった一部の人々(大都市の中上流層、大した苦難がなく日本に戻れた人々)の満州体験の上に抽象化された文化現象ではないかと指摘したい。

(3) 『読売新聞』二〇〇二年二月二五日付、夕刊。

(4) 『毎日新聞』二〇〇四年四月九日付、夕刊。

(5) 『満州』幻想の成立とその射程「アジア遊学」四四、二〇〇二年一〇月、六頁。

(6) 地続きの満州(ロシアの勢力範囲)は日本の朝鮮防衛上の大きな脅威であるとの認識。

(7) 前掲劉建輝「『満州』幻想の成立とその射程」、七頁。

(8) 劉はここで、文化現象として「満州幻想」の成立を、文学の角

- 度——軍歌「戦友」の感傷、「馬賊のかき立てたロマン」「幻想装置としての文学」「ツーリズムの作り出した満州夢」——から捉えてい
る。
- (9) 「発刊の辞」及び岩永裕吉「満蒙文化協会に望む」「満蒙之文化」満蒙文化協会、第一巻、一九二〇年、一頁、一五頁。
- (10) いわゆる「満州文化」というものは、日本人の満州における文化ではなく、広義的に満州地域全体の文化をさすが、日本の国策に奉仕する色彩が強く、またその主役をなしたのも、満州国の暗然たる主人公日本人であると考えられる。
- (11) 「満州文化」に対する中国側の見方について孫邦主編『偽満文化』（吉林人民出版社、一九九三年）を参照されたい。
- (12) 「満州に於ける日本人々口」「日本人の海外活動に関する歴史的調査・第一巻・総論」大蔵省管理局一九五〇年発行、ゆまに書房復刻、二〇〇〇年、二五八頁。
- (13) 満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』河出書房新社、一九六二年、四四一頁。
- (14) この『満洲年鑑』による統計数字は、日本人を含む満洲国全体の様子を把握するものであることを、留意して頂きたい。
- (15) 『満洲年鑑』昭和二十年版、満洲日報社、一九四四年一月、二六二―二六四頁。
- (16) 『満洲年鑑』昭和十七年版、満洲日報社、一九四一年一月、三五九頁。
- (17) 満洲帝国政府編『満洲建国十年史』原書房、一九六九年、九四二頁。

- (18) 植民地文化研究会編『満洲国』文化細目』不二出版、二〇〇五年、四頁。
- (19) 鈴木隆史『日本帝国主義と満州』上、塙書房、一九九二年、序章部分を参照。
- (20) 山田豪一『満洲国の阿片専売』汲古書院、二〇〇二年、四―五頁。
- (21) 『日本外交史辞典』山川出版社、一九九二年、四九三頁。
- (22) アメリカは日本の満州における特殊権益を認める代わりに、「門戸開放」を要求していた（鈴木隆史『日本帝国主義と満州』上、塙書房、一九九二年、二九二頁、参照）。
- (23) 張作霖の部下だった軍閥郭松齢は馮玉祥とむすんで東北軍總司令と名乗り、反張作霖の兵を挙げたが、張作霖支持の関東軍の工作で失敗し、処刑された事件。
- (24) 信夫淳平『満蒙特殊権益論』日本評論社、一九三二年、四九〇―四九五頁、参照。
- (25) 同右、四九五頁。
- (26) 『満洲国』ある歴史の終り、そして新たな始まり』『環』一〇号、藤原書店、二〇〇二年七月、七三頁。
- (27) 大山梓編『山県有朋意見書』原書房、一九六六年、一九六頁。
- (28) 『満洲・満洲国をいかに捉えるべきか』『環』一〇号、藤原書店、四〇頁。
- (29) 『日本史史料』（四、近代）、岩波書店、一九九七年、二六〇頁。
- (30) 『満洲問題の解決』『日本人』一九三号、一九〇三年八月二〇日、二〇頁。

- (31) 満州経営のため、一九〇六年十一月、半官半民の国策会社南満州鉄道株式会社（満鉄）が成立された。鉄道事業のほか、撫順・煙台炭坑の経営、鉄道付属地の経営にも乗り出していった。
- (32) 奉天（現瀋陽）と安東をつなぐ鉄道。もともと日露戦争中日本が敷設した軽便鉄道だが、日露戦後、利権回収のため、清政府は日本の広軌改修の要求を拒否した。しかし、一九〇九年小池張造奉天総領事が東三省総督錫良との間で強制的に覚書を交換させ、広軌鉄道の建設に着工した。
- (33) 内容の詳細は、前掲鈴木隆史『日本帝国主義と満州』上、一八七―一八八頁を参照。
- (34) 一九一三年八月一日、大竹貫一、岡部伊三郎等連名「対支那意見書」、栗原健編『対満蒙政策史の一面』原書房、一九六六年、一〇二頁。
- (35) 『帝国国防論』公民同盟叢書（第二）、公民同盟出版部、一九一五年一月、二五、二八頁。
- (36) 外務省編纂『日本外交年表並主要文書』上、日本国際連合協会、一九五五年、三八一頁。
- (37) 同右書、五二三頁。
- (38) 「対満政策私論」『現代史資料・七、満州事変』みすず書房、一九六四年、一〇三頁。
- (39) 角田順編『石原莞爾資料・国防論策篇』原書房、一九六七年、四〇頁。
- (40) 松岡洋右伝記刊行会編『松岡洋右・その人と生涯』講談社、一九七四年、三四〇頁。

- (41) 松岡洋右『動く満蒙』先進社、一九三一年、序。
- (42) 松岡洋右伝記刊行会編『松岡洋右・その人と生涯』講談社、一九七四年、三四一頁。
- (43) 矢野仁一『満洲近代史』弘文堂、一九四一年、五一三頁。
- (44) 『徳富蘇峰集』明治文學全集34、筑摩書房、一九七四年、二四七―二四八頁、二七三頁。
- (45) 高坂盛彦『ある明治リベラリストの記録——孤高の戦闘者竹越與三郎伝』中央公論新社、二〇〇二年、九四頁。
- (46) 鹿野政直『国家主義の台頭』『近代日本政治思想史』I、有斐閣、一九七一年、二九七頁。
- (47) 『会報』第二集、一九〇一年四月十五日、七六―七七頁。『黒龍会関係資料集』一、柏書房復刻、一九九二年。
- (48) 戸水寛人『満洲の撤兵と日本民族の奮起』『外交時報』六三号、一九〇三年三月、五七―五八頁。
- (49) 里上龍平『近代日本の朝鮮認識』『近代日本のアジア認識』緑蔭書房、一九九六年、二五二頁、二五四頁、二八四―二八六頁、参照。
- (50) 「対満政策私論」の第二、「移民問題より見たる満州」『現代史資料・七、満州事変』みすず書房、一九六四年、一一六頁、参照。
- (51) 「民族と階級と戦争」『中央公論』一九三二年一月号（吉野作造選集）九、岩波書店、一九九五年、三六四頁。
- (52) 同右、三六六頁。
- (53) 吉野の対外認識にある、キリスト教的人道・人格主義に基づいて人間・人格の平等を重視し、植民地支配そのものを否定しない特徴については、拙論「吉野作造の人格主義と石橋湛山のプラグマテ

イズム』『近きに在りて』三二号、一九九七年五月、参照。

(54) 中に「南満州ハ二十万ノ国民ヲ失ヒ十八億ノ国財ヲ糜シタル所ニシテ……」の一節があった(栗原健編『対満蒙政策史の一面』原書房、一九六六年、一〇二頁)。

(55) 曰く「……素ト南満洲及東部内蒙古ノ地タル地理上政治上將タ商工業ノ利害上帝国ノ特殊關係ヲ有スル地域タルハ中外ノ認ムル所ニシテ此關係ハ実ニ帝国力前後二回ノ戦役ヲ経タルニヨリテ特ニ深キヲ致シタルモノトス」(外務省編纂『日本外交年表並主要文書』上、日本国際連合協会、一九五五年、四〇二―四〇三頁)。

(56) 松岡洋右伝記刊行会編『松岡洋右・その人と生涯』講談社、一九七四年、三一四頁。

(57) 戦・病死者の総数は一万三〇〇〇人ほどであったが、九割以上にあたる一万二〇〇〇人は病死であった(海野福寿『日清・日露戦争』日本の歴史、一八、集英社、一九九二年、七八頁参照)。

(58) 石井寛治『日清戦後経営』岩波講座『日本歴史』一六、一九七六年、五三頁。

(59) 日露戦争にかかった戦費は、一般に一五億から一七億とされており、戦・病死者八万一四五五人で、日清戦争の戦・病死者を合わせて九万五〇〇〇弱である(前掲海野福寿『日清・日露戦争』二〇二頁を参照)。

(60) 拙論「満州幻想の成立過程——日露戦前の日本人と満州」『岡山大学文学部紀要』四四号、二〇〇五年二月。

(61) これも、いわゆる「特殊感情」全体の中で一部しか占めないことを指摘しておきたい。